

いや、
iya, jiyuni ikirotte iwaretemo.
自由に生きる
← **って言われても。**
SHO **3**



サンタナ

風の上位精霊で、
ユーゲンの
『元』ダンジョン
マスター。

アクア

水の精霊王にして、
リュースンの
ダンジョンマスター。

アクセル

Bランク冒険者。
ユーゲンの村に
逗留している。

カム

女性三人組
冒険者パーティ
『フェアレディ』の
リーダー。

ルーチェ

ユーゲンにある
宿屋『妖精の宿』の
美人女将。

キャロル

『妖精の宿』の
看板娘を務める
ルーチェの一人娘。

ライム・フジサワ

はくさん いくさおとめ
「白銀の戦乙女」と
称される、
異世界から勇者召喚
された少女。

カズト・イトー

異世界召喚に
巻き込まれた青年。
新女王即位の功労者で、
こくてんし
「黒天使」と呼ばれる。

1 予兆

俺、伊東^{いづみかずと}一刀はある日、道端で突然光に包まれた少女を助けようとして、異世界召喚に巻き込まれた。

召喚を実行したのは、オーシュー王国の女王セリカ。平民が虐^{しいた}げられている国の現状を憂^{うれ}える彼女に心を打たれた俺は、一緒に召喚された勇者ライムとともに、セリカを女王に擁立^{ようりつ}する革命を起こす。元ギルドの受付嬢サニーや、元騎士のグロリア、エルフの元商人ローレルを始めとした頼もしい仲間達とともに、革命を成功させたのだった。

しかし、新女王を支持する勢力はまだまだ少ない。加えて国の南には、長年敵対しているバンドー皇国がある。そこで俺達一行は、やがて来るであろうバンドーとの戦いでの後顧^{こうこ}の憂^{うれ}いを断つ為、まずは王都の北の諸勢力を味方に付けるべく北上した。

ユーゲンダンジョンのマスターである上位の風精霊サンタナを仲間に加えたり、ダンジョン制覇で有名になった俺達の偽者を捕まえたりと、俺達の道中はトラブルが続く。

そしてついに、人攫^{ひとかく}いを行っていたコズカ領の悪徳貴族レパード侯爵を打倒し、関連する領地をセリカの支持者であるレパードの子供達に治めさせることに成功した。

反抗する大物貴族が肅清されたことで、オーシュー王国北部は安定の兆しが見え始める。さらにドワーフの腕利き職人であるガイアや、女神様の啓示を受けたらしいバイコーンのラングラー、ユニコーンのチェロキー、ケットシーのビートが俺達の仲間に加わった。

しかし、順調に成果を上げているかに見えた俺達の旅だが、王都からの手紙で事態が急変する。王国南部に領地を持つ、セリカの兄である元第二王子がセリカの女王即位を不服とし、加えて王国東部の沿岸の諸侯が、バンドー皇国に唆されて不穏な動きを見せているというのだ。

双方の動きに対処する為、俺達は二手に分かれることになり、俺とライムは南部の動きの情報を収集しつつ南下、セリカ達は沿岸部を押さえる為に東進した。

南下する俺とライムには、ラングラーとチェロキー、それにビートとサンタナという頼れる眷属達が同道している。

そうして俺達は今、再びユーゲン村へ向かっていた。

ユーゲン村はその名の通り、ユーゲンダンジョンの付近にあつて、ダンジョンに稼ぎに来た冒険者が拠点としている村だ。

以前訪れた際、とある宿屋の親娘、ルーチェさんとキャロルちゃんにお世話になったのだが、せっかく南下するのだから、様子を見て行くことにしたのである。

俺はラングラーの、ライムはチェロキーの背に揺られ、街道を南下している。

普段のラングラーは黒鹿毛の、チェロキーは芦毛の馬の姿だ。それぞれラン、チェロという愛称で呼ぶことにしている。

人型にもなれるケットシーのビートは猫の姿で、俺の膝の上だ。人型になった彼女は黒髪褐色肌の巨乳美女なんだが、その姿で膝にいられたらぶっちゃけ邪魔だし、かといって後ろにしがみつくのはイヤだつて言うし、気まますぎる。まったく、猫みたいなヤツだ……まあ、猫なんだが。

サンタナは霊体となつて、俺の内部でまどろんでいるようだ。

「今日は野宿かなあ？ 馬で移動する時のペースがまだ分からないね。タカミは通り過ぎちゃったけど、ミスサーまでは少し遠いかな」

チェロの背に揺られながら、ライムが誰にという訳でもなく呟いた。

「まあ、たまには野宿もいいんじゃないか？ 俺達ならかなり快適に過ごせるだろう？」

「それもそうか。カズにいの眷属さまただね！」

俺の言葉に、ライムはにこやかに頷く。

風の上位精霊であるサンタナに頼めば、風で障壁を張ってもらえる。そうすることで周囲の警戒と寝ずの番を任せられるから、何の心配もせずに熟睡できるのだ。ついでに空調も完璧だし。

それに、ランもチェロも、そしてビートも強力な幻獣だから、その辺の野盗や魔物くらいなら余裕で倒せる。

……とまあ、これだけ強力な眷属に囲まれている俺達二人もSランク冒険者であり、どっからで

もかかってこいやあ！　つてなものである。

そんなことを考えていると、頭の中でサンタナが話しかけてきた。

【ご主人様。前方、まだ距離はありますが、戦闘中のようにですね】

俺がたった今索敵で感知した反応に、サンタナも同時に気付いたみたいだな。

俺の索敵能力は、有り余る魔力を周囲に広げることで、自分以外の存在を感知するというものだ。こちらに敵対する奴は赤い光点に、味方ならば青い光点に、そして中立または不明ならば白い光点で、網膜に表示されるように設定している。

「多勢に無勢だな」

向こうがこちらに気付いていない為に光点は白く、敵味方はまだ分からない。だがしかし、配置や動きから状況は判別できた。

「カズにい、行ってみよう！」

もしも無勢の方が悪人だったら問題はないが、そうでなかったらこのまま見て見ぬ振りをするのは寝覚めが悪い。俺はライムの意見に同意した。

「そうだな。しつかり掴まってるよ、ビート。せいやつ！」

「私達も行こう、チェロ。せいっ！」

それなりの距離はあったはずだが、流石にこの二頭は速い。あつという間に戦闘の現場が見えてきた。

冒険者らしい風体の若い女性三人が、野盗と思しき連中二十人ほどに襲われているような状況だ。俺は馬を進めて両者の間に割って入り、冒険者らしき人物に声をかけた。

「助けは必要か？」

「すまないが頼んでもいいだろうか？　奴らは野盗だ。数だけ多いんだ！」

剣士らしい女性冒険者が答える。

「了解した。ライム、やるぞ！」

「はいよ！　任された！」

そこからは一方的な蹂躪だった。俺が魔力の刃を放てば五人の首が一度に切り飛ばされ、ライムが魔法で風の刃を飛ばせば四人が崩れ落ちる。さらにランとチェロがそれぞれ一人ずつ踏み潰すと、形勢は一気に逆転した。

三人の冒険者も立て直して、二人ずつ斬り捨てる。残った三人が慌てふためいて逃げていくが、恐らくアジトに向かうのだろう。

ここは泳がせて一網打尽にしてやろうと考えた俺は追い討ちをかけず、ビートにこっそり後を追わせる。

三人の冒険者は、野盗が視界から消えたのを確認してから、礼儀正しく頭を下げてきた。

「助けてくれてありがとうございます」

「私達はCランクパーティ『フェアレディ』といいます。何かお礼をしたいのですが、生憎と持ち

合わせがなく……」

「ミズサーのギルドまで行けば幾分か蓄えがあるので、よろしければ同道願えないでしょうか？」

三人が、それぞれ恐縮した感じでそう言ってくるが、俺はライムと顔を見合わせ苦笑する。別に報酬目当てじゃなかったしな。

「あー、俺はカズト、こっちはライム。見ての通り冒険者だ。別に礼なんか必要ないよ。通りがかっただけだ」

「しかし！ それではこちらの気が済まないです！」

一応、礼には及ばないと伝えるが、リーダーっぽい雰囲気の人が食い下がる。ちょっと困った。

「んー、どうする？ ライム」

「そうだね……じゃあ、少し協力してもらおうか。それでチャラでどう？」

ライムの言葉に、フェアレディの三人は若干不思議そうにしながらも頷いてくれた。

そうして休みながら話を詰めることになり、俺達五人はライムの空間収納から取り出したお茶会セットの載ったテーブルを囲む。

まだ日は暮れていないが、辺りは薄暗くなってきた。今日は一仕事できちまったし、このままここで野営するか。

そんなことを考えながら、俺は狙いを話した。

「実はさっきの野盗、三人逃がしたが、あれはわざとだったんだ。すぐにアジトの場所も割れるは

ずだから、このままアジトごと壊滅させるつもりなんだよ」

「「は？」」

俺がサラッと放った言葉に、目を丸くする三人。

「ははは、お姉さん達結構やるみたいだし、それに協力してくれたら嬉しいかなー、って」

そこへライムからも追撃。

フェアレディの三人にしてみれば、自分達を助けたどころかアジトごと潰すなんて信じられない、という思いだろう。

「そっちの黒いお兄さん、カズトさんだっけ。あなたは私達と同じくらいの年かしら？ それにそっちのお嬢さんはまだ二十歳前だよ？ なんか異常に強いんだけど？」

三人のうちの一人が、やたらと疑問形で聞いてくる。そんなに俺達ミステリアスか。

「あはは。私達どっちもSランクなんだー」

ライムがちよっと困ったように笑いながら答えた。

するとそれを聞いたフェアレディの三人は、ゴクリと生唾を呑み、頭の中で様々な情報を繋ぎ合わせるような仕草を見せたかと思うと、大きく目を見開いた。

「えっ!? まさかあなた達って……」

「セリカ王女を女王陛下に押し上げた功労者の？」

「『白銀の戦乙女』と『黒天使』……」

三人の反応に、俺は思わず言葉を詰まらせてしまう。

「うっ……俺達って本名は知られてねえのに、二つ名だけは知れ渡ってんだな」

「ははっ、そうだねー。こんなに美男美女のコンビなのに顔も売れてないしね」

ライムは冗談めかしてそう言うが、名前も顔もマイナーなのに、二つ名だけが暴走しているこの感じ。なんかイヤだなあ……

そして、俺達が白銀の戦乙女と黒天使だと分かったフェアレディは、まるでアイドルに群がる熱烈なファンのような状態になった。

「うわー、本物だよ、感激！ 握手してください、握手！」

「噂と違ってすごいカッコイイ人とカワイイ人だったんだ！ きゃー！」

「お話！ お話聞きたいです！ いや、お友達になつてくれませんか!?」

ちよつと待て。噂と違ってってなんだ。

「にやあにやあ」

どうしたものかと思っていると、いつのまにか戻ってきていたビートが俺の足元にすり寄ってきたので、フェアレディに紹介する。

「俺の仲間でビートってんだ。コイツに奴らのアジトを探ってもらってたんだよ」

「「えええ〜!?」」

ビートは驚く彼女達をちらりと横目で見てから、念話で報告してきた。

【カズト様、賊はアジトに十人ほど残っていて、アジトに戻った者を合わせても十三人程度です。人質は確認できませんでしたし、制圧は容易いかと】

ライムにビートの報告内容を伝えると、即答でアジトの制圧を提案してきたので、それに賛成する。

連中も、さっきの半分の戦力で報復に出てくることはないだろう。なんなら、アジトの場所が発覚するのを恐れて、逃げ支度を始めていてもおかしくない。このまま逃がすと厄介だから、速攻がベストだな。

報告にあつた程度の人数なら、フェアレディの三人の手を借りるまでもない。そう考えた俺は、彼女達には野営の準備を整えておくように頼み、アジト襲撃は俺達だけで行うことにした。

作戦を伝えると、三人は戸惑いながらも了承してくれる。

「あ、ええ。分かったわ。気を付けてね？」

そう言った彼女達の視線に込められた感情は、心配八割期待二割といった感じだった。

俺とライムはそれぞれランとチェロに跨り、ビートに声をかける。

「よし、行こうか。ビート！」

「にやおん！」

俺の膝に飛び乗ったビートの案内で、ランとチェロの二頭は、猛烈にダッシュして賊のアジトへ向かった。

二頭の快足で五分ほど走っただろうか。藪の中にある、一軒の朽ち果てそうな民家が見えてきた。【カズト様。その民家の床下に、地下へ繋がる階段があります。その先がアジトですわ】

「そうか、ありがとなビート。サンタナ、周囲の警戒を頼む」

俺はビートを労い、さらにサンタナを呼び出して指示を出す。

【承知致しました。ご主人様】

ふわりと姿を現したサンタナは、そのまま上空へと舞い上がった。監視衛星みたいなモンか。

これで、逃げ出す輩や外部から介入するものがあれば、サンタナが対処してくれるはずだ。

「チェロとランはここで待っててね」

そう言ったライムと一緒に俺は下馬し、二頭の首を撫でた。

【はい。ライムもお気を付けて】

【主よ、ご武運を】

よし、乗り込むか。

2 野盗の狙いは

いるな。索敵の反応を見ると慌ただしく動いている。ビートの報告通り、反応は十三。赤だ。

仲間が大量にやられて焦っているのか、やはり逃げ出す準備をしているようだった。

「ビート、出入口はここだけ？」

【ええ、ここだけですわね】

まったく、バカな奴らだな。出入口がこの床下の穴だけとか、塞がれたら中でミイラになるだけじゃねえか。

「ちゃちゃつと片付けちまうか。お宝でもあれば御の字なだけだな」

「そうだね。まずは全員とつちめてからゆっくり探そう」

階段を降りると短い通路になっていた。わざわざ穴掘って作ったのか、これ？

そして通路の突き当たりには扉代わりなのか、戸板が立て掛けてあった。

罫なんかの不意打ちに備えて、常時魔力障壁を展開して全身を守っている俺から乗り込む。

「ライム、俺の後ろから」

「うん、分かった」

バアン！ と戸板を蹴破り中に入ると、十三人の男が焦ったような表情をこちらに向けてきた。

さつき泳がせておいた奴らは顔面蒼白だ。

「お前ら盗賊だな？ 頭目はどいつだ？」

そう言いつつ、俺は既に十二発のマジックミサイルを宙に浮かべていた。

後で情報も聞き出したいから、マジックミサイルの威力は極小、気絶させる程度に抑えてある。

「てめえか、俺達の仲間を殺りやがったのは！」

一人の男が目を剥いて怒鳴り散らす、聞いているのはこつちだ。

「質問に答えろ。頭目はどいつだ？」

「ふっ、ふざけん……」

こちらに向かつてこうとした男に、マジックミサイルを一発ふち込む。まずは一人。

「頭目はどいつだ？」

「……」

誰も喋らないのもう一発。また一人、動かなくなる。

「どいつだ？」

「こ、このやろう……」

余計な言葉を漏らした奴がいたので、そいつに向かつてさらに一発。

「面倒だな。全部一気に殺るか」

本当に面倒になってきた。

他人を襲って食っていかうって奴らだ。かける情けなんて俺は持ち合わせちゃいない。

「ま、待て、待てくれ！ 頭目は今いない！」

そんな声が上がったが、今喋ったヤツは嘘をついていた。

人とか物の性能や物事の本質を見抜くスキル、『看破』を使っている俺には、人が吐いた言葉が

真実か否かも判別できる。

また一発、今度は嘘をついた男の横の奴に向かつてマジックミサイルを放つ。

「俺に嘘は通じねえぞ？」

すると、ついに心が折れたのか、一人を除いた全員がある男に視線を集中させた。

そう、今嘘をついた男にだ。

「分かった。ご苦労さん」

頭目以外の全員にマジックミサイルを打ち込み、討伐完了。

「お前……悪魔かよ……」

「はっ。盗賊にそんなこと言われる筋合いはねえな」

俺は頭目の一言を鼻で笑いとばし、魔力で作ったリング——バインド・チャクラムで拘束した。

ちなみに、看破で探してみたのだが、ここには期待していたお宝の類は見当たらなかった。

「お前らの処遇は、お前らが襲った被害者に任せる。今からそいつらの所まで連れていくから、楽

しい尋問はその時に、な」

俺が冷たく言い放つと、頭目が暴れて逃げようとした。

「うがああああ！」

俺はすかさず、バインド・チャクラムの内径を小さくしてやる。こいつはただ拘束するだけではないのだ。

「その魔力の輪っかな、甘く見ない方がいいぞ？　大きさは自在、内側をノコギリみたいにして回転させてそのまま上下に分断することも簡単だ。試すか？」

俺がにこやかにそう言うと、頭目は顔を真っ青にして首を横に振った。

「や、やめてくれ。抵抗しない。逃げもしない。全部話す」

よしよし。素直が一番だ。それじゃあフェアレディの所まで連行しよう。

「……カズにいい。私出番なかった」

「あんな小物、勇者様が出るまでもねえだろ」

気絶している連中を叩き起こして、ロープで縛り上げてから連行しているのだが、出番のなかったライムがハムスターみたいに頬を膨らませている。実際、ライムが出るまでもない、簡単なお仕事でした。

「あのね、カズにいい！　あえて言わせてもらいます！　カズにいがそうやって全部やっちゃうから、彼女達が必要以上にカズにいいに依存しちゃうんだよ？」

ライムが言う彼女達とは、別行動しているセリカ、サニー、グロリア、ローレル、それにソアラ達のことだ。

セリカ達は、俺に依存しすぎないようにする為に自らを鍛え（きた）ると言って、あえて別行動することを選択したのだ。あ、ガイアのおっちゃんも甘やかさねえぞ？

まあ確かに、今のライムの指摘は耳が痛いな。

【カズト様は婦人を大事に扱いすぎるのではありませんこと？】

【主よ、何事も緩急織り交ぜるのが効果的かと】
溜息（ためいき）をつきながらそう伝えてくるビートとラン。猫と馬に説教される俺って……

【ご主人様。ご主人様はハーレムを作るべきです。ご主人様のお子をこの世界に満ち溢れ（あふ）させれば、ご主人様亡き後も私は寂しく（さび）ないのです】

さらに俺の中に戻ってきたサンタナの追撃。亡き後って。まだ俺は死ぬつもりはねえよ。まあ、寿命がない存在からすればそういう考えにもなるのかな。

……というか、今はその話題関係ないよね？

「そもそも俺の魔力を分け与えて作り出した分身体つつたら、キャロルちゃんのとこに置いてきたカペラとか、ユーゲンのダンジョンマスターがいるじゃねえか」

【彼女達はある意味では私とご主人様の愛の結晶ではあるのですが、私自身でもあります。微妙なところですね】

愛の結晶ってなんだよ。

「……冒険者のダンナ。さつきから誰と話してるんで？」

脳内で会話してたつもりが声に出てたか。盗賊の頭目からツツコミが入った。

「馬と猫と精霊だ」

「へっ？ いや、そんな——」

「馬と猫と精霊だ」

野営地の焚き火が見えてきたので、強引に会話を終了させた。

「お帰りなさい。早かったわね？」

野営地に近付いたところで、フェアレディの面々が出迎えてくれた。

「ああ、全部で十三人いた。先頭のコイツが頭目で、後ろにゾロゾロいるのが構成員共だ。あんたらに引き渡すから、後は好きにしてくれ。俺はコイツらから情報を聞き出せばそれでいい」

「報酬はいらぬということ？ この野盗共はほとんど貴方達が片付けたのに」

「ああ、金のことには気にしないでいい……今日はもう暗くなってきたし、ちょっと早いけど俺達は先に休ませてもらうよ」

俺はそんな会話を交わしたあと、近くに立っている大きな木に背中を預け、マントにくるまった。
「サンタナ」

【はい、心得ております、ご主人様。ごゆっくりお休みください】

皆まで言わずとも、俺の意を汲んだサンタナが、周囲に風の結界を張る。地面に直接座っているので寝心地はあまりよくないが、外敵を気にすることなく野宿できるのはやっぱり助かるな。

「こっち来いよ」

ライムに手招きすると、彼女は俺の隣に腰かけようとするが——

「そうじゃない。こっち」

俺はくるまっていたマントの前を開け、足の間にライムを座らせこちらに寄りかからせた。いわば俺が背もたれになっている状態だな。そしてそのまま、ライムもマントでくるんでしまう。

「密着しすぎて少し照れるけど、あったかいだろ？」

「うん。あったかい。ありがとう、カズにい。大好き」

こちらを振り返ってライムがにっこり笑う。よかった。ご機嫌は直ったようだ。

……思い返せば、コイツを守ろうとしたことから全てが始まったんだよな。今となっては、ライムを守ることこそが、俺の行動理念になっているとも言えるだろう……それが過保護の原因かもな。ライムに特等席を取られたビートが、ライムのお腹のあたりで喉をゴロゴロ鳴らしていた。



あたし達は女三人のCランク冒険者。パーティ、フェアレディ。

リーダーはあたし——Cランクの剣士のカム。それから他のメンバーは、Cランクの短槍使いヴアルヴと、Dランクの弓使いシリнда。

野盗の集団に襲われたんだけど、向こうの木の下で休んでる二人組の冒険者……カストさんとラ

イムちゃんに助けられたの。

二人ともんでもなく強くて、聞いてみたらあの有名な、セリカ様を女王の座に導いた功労者だったからビックリしちゃった。

噂だと、見た目はガッチガチのムッキムキのゴリラ男とゴリラ女だって話だったのに……ものすごい男とものすごく可愛い女の子なのよ。

カズトさんの方は特にすごいわね。ミステリアスな黒髪黒目で、近くにいるだけで安心して全てを任せてしまいそうな包容力を感じたわ。まだほんの一言二言会話しただけなのに。

ライムちゃんの方も黒髪黒目で、少しタレ目なところがまた可愛い。絶対男の子にモテるタイプなのよね。でも女の子からは反感を買わないタイプ、しかも計算してないのよ。天然で愛されるタイプってやつね。

……思わず『爆発すればいいのに』なんて考えてしまったわ。いけないわね。

こんなことだから行き遅れちゃうのよね。もう二十五歳なのに、いい人がいないなんて……

でも、自分で言うのもなんだけど、見た目はそこそこ整ってるしスタイルもそこそこいい方だし、家事もそこそこなすし冒険者としての腕もそこそこあるのよ？ なんていい男が寄ってこないのかしら、男の人にもそこそこ尽くすタイプなのに。

……話がそれたわね。なんだかあの二人の親密さに当てられてしまったわ。兄妹とも親子とも違うみたいだけど、恋人がしらね。

あ、そうそう。カズトさんってば、野盗を倒した報酬はいらないって言うのよ。

それじゃあこちらの気が済まないから、どうしようってパーティメンバーで相談したかったけど、野盗の監視とか夜間の警戒とかもしないとだから、三人では話し合えなかったのよね……

あら、もう夜が明けそうね。そろそろ皆を起こして朝食の準備をしなきゃね。その時に皆で相談することにしちゃうか。



何かを炒^{いた}めているような音と、食欲をそそる匂いで目が覚めた。俺の胸の中では、ライムが幸せそうな顔で眠っている。

「ライム、ライム」

ライムを優しく起こしてやる。

「うーん……カズに……おはよう？」

「ああ、おはよう」

「んちゅう」

「それは後でな？」

そんなタコみたいな口で迫ってくるな。

「ケチ！」

「はいはい。ほら、あつちでお姉さん達が食事の準備してるから、俺達も準備しよう」

俺達が起きたことに気付いたフェアレディの人が挨拶をしてきた。

「あら、おはよう。もう起きたの？ もっとイチャイチャしてもよかったのに」

この人はリーダーっぽい感じの人だな。そういえばまだ名前聞いてなかった。

「おはようございます。イチャイチャしたいところではあるんですが、一応人目を気にする神経は持ってますんで」

「こちら、カズにいい。私を羞恥心のない無神経女みたいに言うな」

ライムが不満を述べるが、そこまで言っていないだろ。

「ホントに仲がいいのね。羨ましいわ。あ、そういえばまだ名乗ってなかったでしょ、ごめんなさい。あたしはフェアレディのリーダーをやっています、カムといいます。昨日は助けていただいた本当にありがとうございます。あつちの短槍の娘がヴァルヴ、弓の娘がシリンドです」

食事の準備をしているヴァルヴとシリンドもこちらを向いてペコリと頭を下げる。

しかしカムさん、やや碎けた口調と謝辞を述べる時の口調とをすっかり切り替えられるとは、いろいろと弁えた人だということが伝わってきて好感が持てるな。ライムも同じ印象のようだ。

「いいえ、昨日も言いましたが礼には及びません。連中の情報が手に入ればそれでいいので……」

ライムがそう返すが、やはりフェアレディとしては納得がいかないようだ。

「そういうことで有耶無耶にはしたくないのだけれど……せめて、あたし達の朝食を食べていってくれないかしら？」

せっかくの申し出だ、受けても問題ないだろう。

「それは嬉しいですね。ご馳走になります」

「それと、口調は昨夜のものが素でしよう？ いつも通りに接してくれると嬉しいわ」

ははは。この人多分、友達になったらかなり付き合いやすい人だ。

それから俺達は朝食をとってから、一晚放置していた賊に水を与え、フェアレディにも同席してもらって情報収集を進めることにした。南部の元第二王子の不穏な動きに関する情報も、何か知っているかもしれない。

そうして頭目の口から語られたのは、俺達を驚愕させる内容だった。

セリカが王位に就いてからのこの国では、貴族至上主義的な思想を持つ貴族の粛清や、冒険者の綱紀粛正が進められている。それによって、新しい社会構造に適応できない者は野に下り、小さな盗賊団などを組織していつているんだそう。この頭目も、その内の一人なのだという。

そして現在、それらの小規模な組織が合流し、それなりに大きな勢力になりつつある。勢力が大きくなれば相応の拠点が必要となるのは当然の成り行きで、王都の南にある砦か、王都の北にあるユーゲン村を襲撃する計画が持ち上がっているらしい。それでコイツらは、ユーゲン村に比較的近いこの辺りを根城にしてたって訳か。

しかし普通に考えれば、いくら数が多いとはいえ、軍に対処されやすい王都近くに拠点を置く必要はないはずだが……これについてはコイツらの誰も知らなかったから、予想を立てるしかない。……そうか、連中の背後には強力な支援者がいて、増援が期待できるってことかもしれないな。王都の喉元に楔を打ち込み、そのまま反乱を起こさせてセリカ政権の基盤を揺るがすのが支援者、いや黒幕の目的なのだろう。

黒幕としては、実際に行動を起こした者達はいきり捨てて構わない。反乱が起きたという事実だけでもセリカを失脚させる口実になるし、セリカに恭順の意を示している北方の貴族達が掌を返してくれる可能性だってありえる。

そこまで予想できることを皆に伝えてから、俺は言葉を続ける。

「歪んだ世界を正しく導こうとしても、落ちこぼれるヤツは必ずいるってことか」

「そういうのはセリカの仕事だよ。ねっ！ セリ……あ」

つついここにいらないセリカに話しかけようとしてしまったライムが、気恥ずかしそうにしている。

「セリカなら大丈夫さ。それに支えてくれる頼れる仲間も増えた。そして何より、俺とお前がいる」

俺はそう言って、ぽんつとライムの頭に手を乗せる。

「んー、げふんげふん。私達は外した方がいいかしら？」

カムが遠慮がちに言うてくるが、俺は首を横に振る。

「いや、すまん。話がそれた。けど、この情報は王都にも伝えて組織的に対応する必要があるな」
そして少し考える。早急に王都やギルドに情報を渡して動いてもらわないと、かなりの被害が出るに違いない。しかし、ユーゲン村が襲撃される可能性があるのと分かった以上、俺達はそっちへ急ぎたい。南砦の方は王都に近いしそもそも軍事施設だから、簡単に落ちることはないだろう。

「ねえ、お姉さん達。この野盗共をしよっぴくついでに、王都のギルドマスターと騎士団のアコードって人に、この件を伝えてくれないかなあ？」

ライムがそう提案するが、それを聞いたカムが困惑の表情を浮かべる。

「それはいいんだけど、あたし達って普通のＣランク冒険者よ？ ギルマスや騎士団が話を聞いてくれるかしら？」

なんだ、そんなことか。

「ああ、俺の名前を出せば大丈夫だ。特にギルマスは泣きながら協力してくれるよ」

「そ、そうなの？」

「ああ。この伝言を頼まれてくれるのが、俺達への謝礼ってことでどうだい？」

謝礼のことを気にしていた為そう言ったのだが、やはりカムは困惑顔のままだ。

「それでも貴方達は一文の得もないじゃない？」

「……あるさ。セリカが命懸けで作ろうとしている世界、それを壊そうとするヤツらをぶち殺す助

けになるんだ。十分な報酬だよ……」

「カズにい、抑えて！」

おっと、殺気が漏れ出していたみたいだ。

フェアレディの三人は涙を流してガタガタ震えていた。すまん……

気を取り直して三人を落ち着かせたところで、早速行動を開始する。

「俺達は馬を飛ばしてユーゲンに向かうよ。王都の方はよろしく頼む」

野盗共をフェアレディに託し、俺とライムはユーゲンへと急行した。

全力を出したランとチェロのスピードは元の世界のバイクとさほど変わらず、この調子なら午後にはユーゲン村に着くだろう。ライムは日本で普通二輪の免許を持っていたようで、スピード感には慣れているようだ。それでも馬独特の揺れにはまだ慣れてないみたいだけどな。

「サンタナ、宿の親娘に変わったことは？」

【今の所は何も】

分身であるカペラを通して確認したサンタナが答えてくれる。ほっと一息つきつつ、いつ事が起きるか分からないと気を引き締める。

「そうか、急ぐぞライム」

「了解！」

3 ルーチェの過去

昼前に到着したユーゲン村は、幸いにも異常は見られず、以前と同じ様子だった。

「宿に行ってみるか」

「そうだね。キャロルちゃん元気かな！」

そう言っただけで俺達は、ユーゲンダンジョン攻略の拠点にしていた宿へと向かう。

到着した宿の入り口には、以前はなかった看板がぶら下がっていた。『妖精の宿』という名前と、妖精が飛び回るシルエットの絵が描かれている。カペラがモデルなんだろうな。

新しい名前だろうか、この宿にピッタリだ。

そんなことを考えながら、宿の扉を開ける。

「こんにちはー！」

「いらっしゃいませ！ おとまりですかー!?」

元気に対応するキャロルちゃんは、しばし俺達を見つめる。

「わあ！ うそみたい！ おかーさん！ お客さんなのー！ すごいお客さんなのー!!」

キャロルちゃんはそのような大声を上げながら、大興奮で奥に駆けていった。奥にはルーチェさんが



いるはずだから、当然――

「カーズトローさん！ 会いたかったですうー！ー！」

こうなる訳だ。

大声を出しながら、ルーチェさんとキャロルちゃんが突進してきた。

二人を受け止めた俺は、ライムと苦笑を交わしてから口を開く。

「ルーチェさん、キャロルちゃん。二人とも元気だった？ また数日お世話になるよ」

「あらまあ！ 精一杯おもてなしますね！ 私達親娘の恩人ですもの！」

「おにーちゃんとお風呂入れるね！」

お風呂のことはおいとこう。

「それよりルーチェさん、村長と話がしたいんだけど繋いでもらえませんかね？」

そう、俺達には大事な仕事がある。この親娘を守る為のな。

ランとチェロを宿の厩舎きゅうしゃに繋がせてもらった俺とライムは、ルーチェさんに連れられて村長の元へと赴いた。おもむビートといえば、キャロルちゃんに気に入られて宿の看板猫かんばんねこをすることになったみたいだ。キャロルちゃんをお留守番お留守番させることになってしまいが、カペラもビートもいるから心配ご無用ってやつだな。

「……という訳で、この村か南砦、どちらかを拠点とする為に、ろくでなし共がよからぬことを画策しているらしいのです」

俺は、野盗から聞き出した内容をかいつまんで村長に説明した。話を聞いた村長は顔色が悪い。「……なるほど。それでわざわざ知らせて来てくださったのか。感謝しますぞ。それにしても、ルーチェは動揺どうようしとらんのじゃな？」

確かに村長の言う通り、ルーチェさんの表情に特に変化は見られず、いつも通りの柔らかな微笑ほほえみが浮かんでいた。

村が襲撃されるなんて話を聞いたら、普通なら少なからず焦ったり慌てたりすると思うんだが。「村長。カズトさんの指示に従えば問題ありませんよ。宿にいる妖精を私達におくってくれたのも、このカズトさん……黒天使なんです」

ルーチェさんにまで黒天使って呼ばれると、かなりむずがゆいな。

「ま、まさかあなたがダンジョンを攻略した黒天使じゃったのですか!？」

オーバーなくらいに驚く村長を見ながら、ライムがクスクスと笑っている。

「ま、まあそんなところです」

俺が頭を掻かきながらそう答えると、村長はテーブルに手付き頭を下げて言った。

「村長としてお願いしたい。この村を救ってくださいらんか！ 何卒なにぞ！」

「落ち着いてください、村長。その為に私達は来たんです。お世話になったルーチェさんとキャロルちゃんを見捨てることなんてできませんからね」

村長を宥なだめるように、ライムが優しく言う。村長は明らかに安堵あんどしたような表情になった。

しかし、ほっとしている場合じゃない。正面から戦う役目は俺達が担になうけど、村人に犠牲ぎせいを出さないようにするには、村長以下、村人が一丸となって協力してくれなくちゃいけない。村人を纏まとめ上げるという大仕事は彼にはあるんだ。

そう伝えると、村長の表情が引き締まる。

「そ、そうじゃな。うむ、村人の方は任せてもらおうかな。して、何か策はあるのじゃろうか？」

「そうですね……今夜、村の代表として村長を始めとした何人かで、ルーチェさんの宿へ来てください。後は村に駐留ちゅうりゅうしている冒険者とギルド出張所のおっちゃん達にも来てもらおうかな……策についてはそこでお話しますよ」

策と呼べるほどのものかどうかは分からないが、村人の人命じんめいを守る方法は考えてある。

「うむ、承知しましたぞ。それにしても、ルーチェがこんなにも冒険者に心を許すとはのお……」しみじみと語る村長だが、その口ぶりからすると、過去に冒険者絡みのことでルーチェさんに何かあったのだろうか。ちよつと聞きにくいな……

「ええ、キャロルも、初めてカズトさんがいらした時からベツタリなんですよ。カズトさんは他の冒険者とは違います。村長もそのうち分かりますよ」

そう言いながら、ルーチェさんが楽しそうにちらりとこちらを横目で見てくる。

初めて彼女を見た時の印象は、美人だがどこか笑顔に陰がある、そんな感じだったんだけどな。いつのまにやら、随分ずいぶん明るくなった印象だ。

「それでは村長、俺達は一度ダンジョンに行つて出張所のおっさんに話を通してきますんで。夜、宿に集合しましょう」

この場ではこれ以上話すこともないので、俺とライムは村長の家を出て、ユーゲンダンジョンに向かった。

「よお、おっちゃん、久しぶり！」

「ん？ おああああ！ 久しぶりだな。この前は知らなかったけど、お前、黒天使って呼ばれてるんだってな!？」

そんなに興奮しなくても。っていうか二つ名のことはどうでもいいだろ。

「実は大事な話があつて来た。今夜、ギルド職員とこの村にいる冒険者をルーチェさんの宿に集めてもらいたい。強制じゃないが、命に関わる事態だ。Sランク冒険者のカズトとライム、両名からの要請^{ようせい}つてことで動かしてくれ」

冒険者カードを見せながらおっさんに告げると、流石に『Sランク二名』からの要請ということで神妙な表情になる。

実際には、Sランクだからといってギルド職員や冒険者を動かす権限はない。それでも、Sランクが危険と判断し動員を要請するような事態を、ギルド側も無視できない為協力してもらえることが多いそうだ。

「了解した。お前らがそう言うんだ、よほどの事態なんだろうな。王都や本部への連絡の手配はした方がいいか？」

「ああ、それなら俺達と同じく詳しく事情を知っている、フェアレディってCランクパーティが王都に向かつてるから大丈夫だ」

「ほお、抜かりはないってか。流石黒天使、大したもんだ。よし、こっちは任せてくれ」

相変わらず黒天使と呼んでくるおっちゃんと別れた俺達は、宿に戻るのだった。

「黒天使って呼ぶの、マジでやめてほしいんだけどなー」

「もう、カズにい、カッコイイじゃない、黒天使。諦めて受け入れちゃえばいいのに。私、好きだけどな」

「諦めてるよ。でも、直接呼ばれるのは恥ずかしすぎて心が抉^{えぐ}られるんだよ」

宿への道中、二つ名についての話題で盛り上がる。

そんな時、突然現れたサントナが話しかけてきた。

【ご主人様、宿に不審者がいるようです。ルーチェの居場所をキャロルに尋ねているそうですが】
キャロルちゃんの傍^{そば}にいるカペラから、情報が送られてきたんだろう。

「居場所を聞いているだけだろ。問題があるのか？」

【キャロルが怯^{おび}えているのです】

「ライム、ルーチェさんを迎えに村長の家に行ってくれ！」

サンタナの言葉を聞いた俺は、ライムをルーチェさんの迎えに走らせ、猛然と宿へダッシュした。宿の扉まで来たところで、普通を装い扉を開ける。

「キャロルちゃんたいたいまー」

「あつ！ おにーちゃん！」

俺の姿を認めたキャロルちゃんが、涙目で駆け寄ってきた。

それを見て、受付のところにいた下品さが滲み出ている三十代くらいの男が俺に凄んできた。

「おめえ、なんだよ？ 邪魔すんじゃねえよ」

「邪魔もなにも。お前こそ幼女泣かせて何やってんだ？ 変態か？」

「そんなガキに用はねえ。用があるのは母親の方だ」

まったく、この忙しい時に。しかも変態は否定しないのか。

「キャロルちゃん、この変態オジサンに何かされたの？」

「なにもされてないけど、前にこのおじさんが来たとき、おかあさんがすごくかなしい顔してたの。だからおかあさんに会わせるのはダメなの」

いつも明るい笑顔のキャロルちゃんが涙を浮かべているのを見ると、心が痛い。

やっぱりルーチェさんに会わせるのはダメだろうな。そう考えて変態に向き直る。

「……その娘がダメだってよ。帰れ変態」

「おい若造。粋がつてると早死にすんぞ？ 俺あBランク冒険者で貴族の血筋だ。まだ死にたくないだろ？」

おい。今、恫喝されたよね、俺。それじゃあちよつと話し合いをしなくちゃな、話し合いを。

「キャロルちゃん、ちよつと俺はこの変態おじさんと出かけてくるから、カペラとビートとお留守番しててね？」

「うん！ キャロルお留守番してるー！」

さて。

「おい、若造！ 何勝手なこ……」

俺は何か言いかけた変態の顔面にアイアンクローを食らわせる。そのまま変態を持ち上げて宿から出て、地面に叩きつけた。

「がはっ！」

ちようどその時、ライムがルーチェさんを連れて戻ってきてしまった。タイミングが悪かったな。そして変態の姿を見た瞬間、ルーチェさんの様子がおかしくなった。

「あ、あ、ああ……」

顔面蒼白になって、ガタガタ震えだしたのだ。

「よお、ルーチェ。久しぶりに会いに来てやったぶへっ！」

変態はルーチェさんの姿を見ると起き上がって話しかける。

いや、勝手に喋るなよ。俺は変態の顔面に魔力を飛ばしてエアードコピンを食らわせてやる。

「ライム、宿の中へ」

「うん。さ、ルーチェさん、いこ？」

俺の言葉にライムは頷き、ルーチェさんに肩を貸して宿に入ってしまった。

しかしこの変態、この親娘に一体何しやがったんだ？ ルーチェさんの怯え方が尋常じゃない。それとこいつ、偶然ここに来たのではない気がするんだよな、なんとなくだけど。貴族の血筋と言っていたが、どこの家とは言っていないのも気になる。

とりあえずここから離れる為に、変態に腹パンを食らわせて気絶させてから、両手足をバインド・チャクラムで拘束して、村の広場へ引き摺^ずっていく。

当然、そんな光景を見て驚く村人がいるんだが……変態の顔を見た彼らの視線が、その瞬間に激しい嫌悪のものに変わる。

広場に到着して変態を転がすと、村人の一人が話しかけてきた。

「なあ、この男、今度は何やらかしたんだ？」

それは逆に俺が聞きたい。というか『今度は』？

「ああ、宿でキャロルちゃん泣かせた変態だからな。オシオキしようと思って」

「そうか……また宿に来やがったのか、この外道^{げどう}。あんた、ありがとうな」

さっきの発言と様子を見る限り、この村人は事情を知っているっぽいな。

「どういうことだ？」

「部外者である俺の口からは詳しいことは言えねえが……こいつがこんなザマになってるって知ったら、村の皆があんたに感謝するだろうさ。まあ、謝罪もしなくちゃいけねえんだがな」

肝心なところはボカして教えてくれない村人。

「事情については、この男か、ルーチェから聞いてくれ。すまねえな」

そう言っつて、村人は立ち去っていった……なら仕方ない、当事者に聞くとしよう。

「そうか……おい、起きろ変態」

バインド・チャクラムをぎゅっと締め付ける。

「がっ!? 痛ええ! 痛ええ! やめろてめえ!!」

「立場をわきまえろ変態」

さらにキツくしてやろう。

「ぎゃああああ! 分かった! 分かったから! すみません! やめてください!」

俺は追加でもう一つのチャクラムを作り出し、変態の目の前に浮かべる。

「コイツは、今お前の手足を拘束してるのと同じものなんだがな……こんな便利なこともできるんだよ」

変態の腰にあった剣を抜き、刃をチャクラムの輪に通す。そしてチャクラムの内側を刃状にして、回転させながら徐々に直径を小さくしていく。

——チュイン！

そんな鋭い金属音とともに、変態の剣はあっさりと切断された。

「分かったか？ 素直に話してくれるよな？ お前の手足が剣より硬いってんなら話は別だが」
変態は脂汗あぶらあせを流してガクガク頷く。まあ、話したからといって助けるとは言っていないが。

時折チャクラムを回転させて脅しながら、この村に何をしに來たのか口を割らせたが、コイツはとんでもない外道だった。

「カズにい……」

粗方話あらかたを聞き終わった時、ライムが暗い顔でやってきた。

「お前もルーチェさんから聞いたのか？」

「うん……」

「ライム、俺の話を聞いたら多分怒りは数倍になる。それでも聞くか？」

「うん、聞く……」

そして俺は、変態から聞き出した内容を、ライムに話した。

こいつは二年前、ルーチェさんを寝取る目的で彼女の旦那だんなさんをパーティに誘い、ダンジョンの中で殺した。あくまでも魔物にやられたってことにしてな。

そこまで聞いたところで、怒りを顔に滲ませながらライムが言葉を引き継ぐ。

「そっか、その後のことはルーチェさんから聞いたよ。幼いキャロルちゃんと二人きりになって途方に暮れているルーチェさんの弱みに付け込んで、関係を強要したんだよね？」

そう、こいつはライムの言う通り、しばらくの間宿に逗留とまりゆうして、金銭面での援助を盾にルーチェさんに愛人になることを強要した。幼いキャロルちゃんを抱え、夫がダンジョンから戻ってこなくなったルーチェさんは、断るに断れなかったんだろうな。

「本当に許せないよね、この外道！」

「かつ、はっ……」

怒り心頭といった様子で、ライムが変態の股間こかんを思い切り蹴り上げた。うお、見るだけできゅっ！ ってなるぜ。変態は白目を剥いて、ピクリとも動かなくなる。

ライム自身も暴行されかけた経験があるので、このテの男に対する憎悪ぞうおも人一倍だ。

「ライム、まだ続きがある。昨日の野盗の頭目が言っていた『大きな勢力』、その組織の首領がこいつの父親で、しかも王都の革命で取り潰された貴族の一人だ」

さっきこの貴族が言わなかったのは、既に取り潰されて土地がないということだったようだ。

「じゃあコイツがここに来たってことは……」

ライムの推測通り、連中のターゲットはこの村だ。コイツはかつて逗留せつじゆうしていたからと斥候役せつこうやくを申し出て、ついでにルーチェさんを手籠めてかぎめにするつもりだったみたいだが。

「じゃあ近くにその組織との繋ぎのヤツがうろついているんじゃない？」

「いや、この変態は邪魔されずに楽しみたかったんだろうな。繋ぎを取るのは二日後、襲撃は五日後の予定だそうだ」

ライムに説明する為とはいえ、改めて口に出していたらフツフツと怒りが込み上がってきた。

——そんな時だ。

「いやあああつ！ 殺してやるうつ!!」

どこかで話を聞いていたのか、逆上した様子のルーチェさんがナイフを持って突っ込んできた。多分、こいつが旦那さんを直接殺したことまでは知らなかったんだろうな。

うん、気持ちに分かる。でも……

俺はルーチェさんの正面に立ち、抱きしめた。彼女の持つナイフは、魔力を身体の周囲に張り巡らせる魔力障壁を常時展開している俺には刺さらず、根元からポッキリと折れる。

しかしルーチェさんは抱きしめられて我に返ると、俺のことを刺してしまったと思ったんだろう、再び錯乱さくらんしてしまう。

「はっ!? いや！ なんで!? カズトさん!? いやああ!」

「大丈夫、落ち着いて。俺はどこも怪我しじゃないよ。ナイフを見てごらん?」

そう言われて真つ二つに折れた手元のナイフを見た彼女は、腰が抜けたのかその場にへたりこんでしまった。

「こんな外道の血で、ルーチェさんが手を汚すことはないよ。俺がやるから。それからライム、

お前、マジでルーチェさん頼むぞ?」

まったく。これでルーチェさんは真実を知ってしまった。ちゃんと見張っておけよな。

「あー、はい。ごめんなさい。お説教は後で受け付けます」

さて、そろそろ夕方だな。

「ラングラー!!」

一声呼ぶと、ほどなくしてランが駆けてきた。

【お呼びでしょうか、主】

「ちよつとコイツを殺さないように運んでほしいんだけどさ」

【お安い御用です、主よ】

ランは変態の頭を、噛み砕くだかない程度の力でがぶりと啜くわえる。

「俺はこの変態捨ててくるから。ルーチェさん、美味しい晩ご飯よろしく!」

そう言い残して、俺とランはこの場を離れた。

それからしばらくして、宿に戻って食堂に足を運ぶと、豪勢うげいな食事とライム達が待っていた。キャロルちゃんは、もう寝たのかな?

「カズにい、どこに捨ててきたの?」

「私も知りたいです。心にけじめをつけたいので」

ライムとルーチェさんが、結末を教えてくださいとせがむ。

「そう。えーとね、ダンジョンの中」

「えっ」

俺の答えが予想外だったのか、二人ともボカーンとしていた。

「詳しく言うと、最下層のボス部屋の前まで転移して、丸腰にしてからボス部屋に蹴りこんで帰ってきた」

「カズにいいにしては比較的穏便^{おんびん}というか……」

そうだよな。丸腰とは言え、ヤツもBランク冒険者らしいからな。生き残るチャンスがない訳じゃない。だけど、俺がそんな生易しい^{なまや}はずないだろ？

「それでもないよ。サントナにさ、今の最下層のボスって何？ って聞いたんだよ。そしたらさ」

【お聞きになりたいですか？ ライムにルーチェ】

「そ、そこまで言われると気になるかな？」

「私も気になってしまいましたよ。サントナ様」

突如^{とつじ}顕現^{けんげん}したサントナが、ドヤ顔で話し始めた。

【身長五メートルほどの大きさの、黒光りしていてカサカサ^{うごめ}蠢く虫で、確か名前はゴキ——】

「すとーーっぶー！」

【——ブリと言いましたか】

ライムの大声での静止をものともせず言い切りやがったよ、サントナ。

「ま、そういう訳でさ。あんな外道、自分の手を汚して殺すよりは、巨大なGにでも食わせた方がいいだろ？」

「た、確かにそうだね……ルーチェさん、ごめんなさい。せつかくの美味しそうな晩ご飯だったのに食欲なくなっちゃったわ……」

「そうですね……」

俺の言葉にライムがげっそりとしながらルーチェさんに謝り、ルーチェさんも力なく首を横に振る。

【では、ライムが食べないのなら私がいただきます！】

「ルーチェさんと仰^{おつしや}ったかしら？ 私にもくださいます？」

全く気にした様子のないサントナがテーブルに着くと、ビートもいつの間にか人型になっており、やはりテーブルに着いた。二人とも、Gの話のあとなのに全然気にしてねえな、俺もだけどさ。

突然現れた美女に目を白黒させるルーチェさんに、こいつはビートが人化した姿だと伝えると、少し驚いた様子を見せながらもすぐに食事の準備をしてくれた。

もくもくと食べているサントナとビートを横目に、ルーチェさんが囁く^{ささや}ように小さな声で言う。

「これで、ようやく……本当に笑って明日が迎えられそうです……カズトさん。ありがとう」

につつりと笑みを浮かべたその表情には、いつぞやの陰りはもう見られなかった。